

ワシュティ

エステル記 1 章～2 章 1 節

聖書の中であまりに有名な女性を描いているエステル記。でも、そのエステルを見るその前に、エステル記に出てくる最初の女性のワシュティを見てみたい。聖書は神様のことばで、不必要な箇所はないはずだから。しかも、エステル記の最初の 1 章をたっぷり使って描かれている女性。このワシュティは、読み飛ばしてはいけない女性だっ
て思えるんですね・・・

クセルクセス王(参考文献)

ウィキペディアより

紀元前 480 年、海・陸の大軍を整え**ギリシア**遠征を企てる。遠征の際、**ヘレスポントス海峡**に船橋を架け、**アトス岬**に運河をきり開いて遠征軍を進め、**アルテミシオンの海戦**(Artemision)でギリシア海軍と戦う。この戦いは**ヘロドトス**の『**歴史**』によればギリシア海軍がやや優勢であったが、後述の**テルモピュライの戦い**でギリシア連合軍の陸軍が敗北したためギリシア海軍が自主的に**サラミス**へ撤退した。

同年 **8 月**、テルモピュライの戦いで**スパルタ王レオニダス 1 世**を敗死させる。**9 月**、**アッティカ**地方を遠征したが、**サラミスの海戦**(Salamis)で敗れ、帰国。

翌 **紀元前 479 年 8 月**、**マルドニオス**の率いる陸軍は**プラタイアの戦い**(Plataiai)で敗北、敗残海軍は**ミュカレの戦い**(Mykale)で撃滅され、ギリシア軍の反撃に苦しむ。

ギリシア遠征で大打撃を受けたクセルクセスは帰国し、事実上クセルクセスのギリシア遠征は失敗に終わった。その後、ペルシアは大規模なギリシア遠征を行うことも無かったが、ペルシア戦争自体は息子の**アルタクセルクセス 1 世**が**カリアスの和約**を結ぶまで継続している。

帰国後、有名な**万国の門**(**英語版**) (クセルクセス門とも)などの大規模な建築事業を数多く行ったが、これにより国の財政がさらに圧迫され、次第に国力が衰えた。

最期は側近**アルタバノス**(**英語版**)に暗殺された。

『**旧約聖書**』の「**エステル記**」に登場するペルシアの王**アハシュエロス**(**en**)は、クセルクセス 1 世をさしていると伝統的に考えられている。「エステル記」では、アハシュエロスは后妃**ワシュティ**(**英語版**) (**アメストリス**、ワシテとも)が反抗的であるためこれを廃し、その代わりとしてユダヤ人の乙女**エステル**を后妃とする。王の大臣ハマンがユダヤ人を絶滅する企てようとしている事を知ると、エステルは叔父**モルデカイ**と謀り、かえって大臣を死刑に

追い込み、これを阻止した。その後モルデカイは王の宰相となった。

エステル記

エステル記の背景

1:1 クセルクセスの時代、クセルクセスが、インドからクシュまで百二十七州を治めていた時のことである。

1:2 クセルクセス王がスサの城で、王座に着いていたころ、

「クセルクセスの時代」紀元前496－475年頃。クセルクセス 1 世。クセルクセスはギリシャ語。「インドからクシュまで」クシュとは今のエチオピアとかスーダン辺りまでとなると・・・ローマ帝国も顔負けの巨大帝国だったことが分かる。「インドからクシュまで百二十七州を治めていた時」は、ペルシャ帝国の領土が最大で、一番栄えていたころ。

クセルクセス王による宴会(対ギリシャ戦のための作戦会議)

1:3 その治世の第三年に、彼はすべての首長と家臣たちのために宴会を催した。それにはペルシアとメディアの有力者、貴族たち、および諸州の首長たちが出席した。

私の読んだ注解書みたいなのによると、「治世の第三年」クセルクセス 1 世はこのころギリシャに戦いを挑んでいるので、この宴会はその戦いの計画を話し合うために王が帝国中から人を集めたと考えられている。先にも書いたが、一大帝国が号令をかけ、挙国一致での戦争の用意をするのに、宴会っていうのは、文化なのかな？やけに宴会が多い国だ。ところで、ウィキペディアで調べたところによるとその際の対ギリシャ戦でのペルシャ側の兵力は 20 万と言われているので、かなりの人たちが集まったのであろう。

「すべての首長と家臣たちのために宴会を催した」ペルシャ・メディア帝国の国中から主だった有力者たちが集まることができる宴会場を持つことができること自体すごい事。しかも在位 3 年でそのような用意ができた。

1:4 王は彼の王国の栄光の富と大いなる栄誉を幾日も示して、百八十日に及んだ。

宴会の目的は王の所有している栄光と富と栄誉を家臣に見せる事。大国の王であるし、これから戦争に行くわけだから仕方がないが、かなりの見栄っ張り。「百八十日に及んだ」ということは、ほとんど半年。それほど、豊かであったことがわかる。

スサの城での 7 日間の宴会の様子

1:5 この期間が終わると、王は、スサの城にいた身分の高い者から低い者に至るまでのすべての民のために、七日間、王宮の園の庭で宴会を催した。

「スサの城にいた身分の高い者から低い者に至るまでのすべての民のために、七日間、王宮の園の庭で宴会を催した」要職についている家臣への宴会が半年近く続いた後で、家臣だけでなく、身分を問わず民全てのために一週間も宴会をしている。し

かも王宮の園の庭で。相当な広さであったことが分かるし、これだけの宴会の準備をするための奴隷もかなりの数であったであろう。これまでの戦争で多民族や他国からゲットした(おそらくはあくどい手口で)金品がたんまりあったであろうし、征服した人々を戦利品として奴隷にしていたら、こんなことができたのであろうが。もし、私の読んだ解説書が正しければ、ギリシャに戦争を仕掛けることを考えていたということになるから、報酬の前払いと言うか、いい思いをしたんだから、お前たち頑張っただけ、みたいなものを期待したのかもしれない。いずれにしても、クセルクセス王は自分の威厳や権威をしっかりと人々に見せるチャンスであったはず。そのおぜん立てを側近もしていたのだろう。

1:6 白綿布や青色の布が、白や紫色の細ひもで大理石の柱の銀の輪に結び付けられ、金と銀でできた長椅子が、緑色石、白大理石、真珠貝や黒大理石のモザイクの床の上に置かれていた。

ただ広い庭があっただけでなく、建物やデコレーションもかなり豪華。布も白や青ときちんと色を付けるのは技術が必要だっただろう。細紐も白や紫と色がついている。しかも大理石の柱や銀製の輪。長椅子が金と銀でできている。フローアも宝石や特殊な大理石を使ったモザイクになっている。豪華絢爛だ。

1:7 金の杯で酒がふるまわれたが、その杯は一つ一つ種類が違っていた。王室のぶどう酒は、王にふさわしく豊かにあった。

その豊かさは、宴会の食器やぶどう酒にも及んでいた。客に出されるぶどう酒は豊富で、金の杯でふるまわれたが、杯が一つ一つ種類が違うというすごさ。

1:8 しかし飲酒は、「強要しないこと」という法に従っていた。だれでもそれぞれ自分の思いのままにさせるようにと、王が宮廷のすべての長に命じていたからである。

「飲酒は、「強要しないこと」という法に従っていた」ダニエル書を読んでも分かることだが、メディア・ペルシャ帝国はバビロン帝国とは違い、法治国家。王は好き勝手ができるわけではなく、王であっても法令に従わなければならなかった。ここでも、それを見ることができる。どのような経緯があったのかはわからないが、酒宴の席であっても、一気飲みを強要されることもなく、自分が好きにしてよいと言うのは面白い。しかも、その法律を結構わがままそうに見える王が守り、家臣にもきっちり指示を出していたのも面白い。

ワシュティ登場

1:9 王妃ワシュティも、クセルクセス王の王宮で婦人たちのために宴会を催した。

宴会に耽っていたのは、殿方たちだけではなかった。集まってきた高官の妻たちのために王妃ワシュティは宴会を催している。彼女なりの内助の功か？

クセルクセス王ワシュティを呼び出す

1:10 七日目に、クセルクセス王はぶどう酒で心が陽気になり、王に仕える七人の宦

官メフマン、ビゼタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタル、カルカスに命じ、
1:11 王妃ワシュティに王冠をかぶらせて、王の前に連れて来るようにと言った。彼女の容姿がすばらしかったので、その美しさを民と首長たちに見せるためであった。「七日目」ということは、最終日ということになる。「クセルクセス王はぶどう酒で心が陽気になり」お酒は人の心を変えてしまう。時にしなくてもいいことをしてしまうことさえある。「王に仕える七人の宦官メフマン、ビゼタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタル、カルカスに命じ」ワシュティを呼びに行かせるのに、7 人もの宦官に命令を下しているのは、なぜだろう？しかも、全員名前付き。もしかして、ワシュティを呼び出すのに 7 回呼び出しに行かせたのかも。それをワシュティはことごとく断ったとか？
クセルクセス王は自分の持ち物を見せびらかすだけでなく、今度は容姿がすばらしく美しい自分の妻を見せびらかすことにした。
1:12 しかし、王妃ワシュティは宦官から伝えられた王の命令を拒み、来ようとはしなかった。そのため王は激しく怒り、その憤りは彼のうちで燃え立った。
もし、前述の通りなのであれば、王様もそりゃカッコとくるのも仕方ないかも。7 人という完全数がかかわれているのも、ワシュティが徹底的に断ったってことになる。

ワシュティ処分の方法

1:13 そこで王は時を熟知している、知恵のある者たちに言った——このように、法令と裁判に詳しいすべての者に諮るのが、王の慣わしであった。

13 節から以降、クセルクセス王の統治の仕方をうかがい知ることができる記述になっている。

バビロンの場合は、王は一人独裁の専制君主だが、ペルシャ・メディア帝国は一応法治国家。「法令と裁判に詳しいすべての者に諮る」、この「すべて」というのも、面白い。徹底している。

1:14 王の側近はペルシアとメディアの七人の首長たち、カルシェナ、シェタル、アデマタ、タルシシュ、メレス、マルセナ、ムムカンで、彼らは王の面前に控えながら、王国の最高の地位に就いていた——

「王の側近」は、すなわち「ペルシアとメディアの七人の首長たち」で、具体名もあがっている。そして、この 7 人は「王の面前に控えながら、王国の最高の地位に就いていた」。王よりは下だが、王に次ぐ第二の地位に君臨していた人は 7 人いたということになる。

王の質問

1:15 「王妃ワシュティは、宦官によって伝えられたクセルクセス王の命令に従わなかった。法令にしたがって、彼女をどう処分すべきか。」

クセルクセス王の質問。「法令にしたがって」王が自発的に法令に従おうとしている。自分勝手にしないところが、面白い。

「どう処分すべきか」酒の席とあっても、反抗的な妻に対し、処分とは、厳しい。

側近ムムカンの答え

1:16 ムムカンは王と首長たちの前で答えた。「王妃ワシュティは王一人だけではなく、クセルクセス王のすべての州の全首長と全住民にも悪いことをしました。

7人の中でも「ムムカン」がリーダー格であったのであろう。「王一人だけではなく、クセルクセス王のすべての州の全首長と全住民にも悪いことをしました」一国の王妃たる者、全国民の女性の代表、模範でなければならないという考え。

1:17 王妃のことが女たちみなに知れ渡り、『クセルクセス王が王妃ワシュティに、王の前に来るように命じたのに、来なかった』と言って、女たちは自分の夫を軽く見るようになるでしょう。

1:18 今日にでも、王妃のことを聞いたペルシアとメディアの首長の夫人たちは、王のすべての首長たちにこのことを言って、並々ならぬ軽蔑と怒りが起こることでしょう。この発言をしているムムカンも首長の一人であり、王妃の態度が自分の妻に悪影響を与えること、ひいては国中の男性への悪影響を心配する。

1:19 もし王がおよろしければ、ワシュティはクセルクセス王の前には出てはならない、という勅令をご自分でお出しになり、ペルシアとメディアの法令の中に書き入れて、変更することのないようにされてはいかがででしょうか。王妃の位は、彼女よりもっとすぐれた者にお授けください。

「もし王がおよろしければ、…勅令をご自分でお出しになり、ペルシアとメディアの法令の中に書き入れて、変更することのないようにされてはいかがででしょうか」面白いアドバイス。国政がこのように行なわれていたのか。

1:20 王が出される詔勅がこの大きな王国の隅々まで告げ知らされれば、女たちは、身分の高い者から低い者に至るまでみな、自分の夫を敬うようになるでしょう。」

1:21 この進言は王と首長たちの心になかったので、王はムムカンの言ったとおりにした。

法令の実施の仕方

1:22 王は、王のすべての州に書簡を送った。各州にはその文字で、各民族にはその言語で書簡を送り、男子はみな一家の主人となること、また自分の民族の言語で話すことを命じた。

「すべての州に書簡を送った」。「各州にはその文字で、各民族にはその言語で書簡を送り」さすが大帝国だけある。自分たちペルシャ・メディアに対しては自分たちの国の言葉で、征服した民族に対しては、その民族の言葉で支配している。

2:1 これらの出来事の後、クセルクセス王の憤りが収まると、王はワシュティのこと、彼女のしたこと、彼女について決められたことを思い出した。

「これらの出来事の後」とあるが、様々な注解によると、1 章と 2 章の間に対ギリシャ戦が行われ、ペルシャ軍は敗北する。テルモピュライの戦い(地上戦で、ギリシャのスパルタ軍との戦い)はかろうじて勝つも、被害甚大。アルテミシオンの海戦に至っては、大敗北を喫して、落胆して帰国したと言われている。

酒が入っていた時にカッカしてしたことを思い出して、後悔しているのでしょうか。ワシュティのことを懐かしく思っていたのかもしれない。ダニエル書でも書かれているが、一旦法律を作ってしまうと、たとえ王であってもそれを変えることができない。いずれにしても、このようにしてエステル登場のおぜん立てが整う。

夫として、人間としてのクセルクセス王についてどう思うか。その根拠となる聖書箇所も。

妻として、人間としてのワシュティについて、どう思うか。その根拠となる聖書箇所も。自分の生活に何か適用できることはあるか。

新しく知ったことや、分かったことは？